

参考資料：岡山縣上道郡古都村史、現代古都の郷、ふるさと古都
岡山史蹟めぐり（岡山市立西大寺公民館古都分館）、岡山市の地名

こづじあと 居都寺跡

我が国に大陸から仏教が伝えられると、急速に蘇我氏をはじめ貴族階級に信仰されるようになった。聖徳太子の仏教興隆政策によって飛鳥時代には畿内（きない：都や皇居に近い地域を指す呼称）及びその周辺には寺院が建てられ、やがて大化改新を経て大和朝廷の権力が確立し、奈良時代に入るとともに仏教は国教として国家権力によって全国に広められていった。

聖武天皇によって全国の国府には国分寺、国分尼寺が建てられたが、備前の国においては国府から程近い旧高月村大字馬屋の地に建てられた。恐らくこれと前後して備前国内に数多くの寺が建てられたと考えられるが、特に国府の周辺には多くの寺院が建てられたと思われる。その証拠として奈良朝時代の様式の瓦が寺院跡と考えられる地域から発見されている。

永山卯三郎氏（明治～昭和期の郷土史家）は岡山県通史において、高島村大字賞田小字中田を上道寺、幡多村大字赤田小字塔元を幡多寺、古都村大字穴甘小字池の尻を居都寺と命名されている。無論奈良時代にこのように称したか否かは文献の伝わっていない今日では知る由もないわけであるが、永山氏の如く地名による名称が最も妥当といえよう。

居都寺は大字穴甘の総ヶ池の南側、宿から土田に通ずる県道の左側の田地のあたりにあったと考えられる。今日では田地の中に寺の諸堂及塔の礎石を1つも発見することは出来ない。

しかし瓦の出土状況から考えてこの地に相当の規模の寺院があったことは疑いなく、出土瓦が赤く焼けただけであることから、何時の時代かに火災によって焼失し、その後再建されることなく荒廃してしまっただと考えられる。礎石も又次第に持ち去られ、今日の如き田地となってしまったのであろう。

平瓦、巴瓦は田地、溝の中等に相当量今日でも発見出来るが、既に大形の破片はなく、小片のものが一面に分散している。

採收したものは、居都寺の奈良朝様式の蓮弁模様を最も良くうかがうことが出来る。

玉井伊三郎氏は、居都寺の巴瓦を採拾され同氏編の（吉備古瓦図譜）昭和4年刊にそれを写真版として収められている。現物は昭和20年の戦災で焼失した。